



Data	2023-95
監督・脚本: 申瑜 (シェン・ユー)	
プロデューサー: 李玉 (リー・ユー)	
方励 (ファン・リー)	
脚本: 邱玉潔 (チウ・ユージェ) / 方励 (ファン・リー)	
出演: 万茜 (ワン・チェン) / 李庚希 (リー・ゲンシー) / 是安 (シー・アン) / 柴燁 (チャイ・イエ) / 周子越 (チオウ・ズーユエ) / 黄覺 (ホアン・ジュエ) / 潘斌龍 (パン・ビンロン)	

みどころ

近時、中国の第8世代監督や若手女性監督の活躍は華々しい。『兎たちの暴走』という何とも奇妙な邦題(?)の本作は、第33回東京国際映画祭でプレミア上映されて話題を呼んだ、中国で最も注目される新進気鋭の女性監督、申瑜(シェン・ユー)の長編デビュー作だ。

婁燁(ロウ・イエ)監督の『シャドウプレイ【完全版】』(18年)は2013年に広州市の“都会の村”で起きた再開発を巡る“騒乱”を題材として、1980年代から30年間に及ぶ中国の経済成長の中で起きた人間の歪みを、時代に翻弄された7人の男女の姿から暴き出していった名作だった。それと同じように、婁燁監督の制作陣に支えられた本作も、2011年に現実起きた“ある誘拐事件”にインスパイアされた申瑜監督が紡ぎ出した“母と娘の悲劇”だ。

ベートーヴェンの交響曲第5番『運命』が冒頭に力強い主題を提示するように、また、多くの婁燁監督作品と同じように、本作冒頭に提示される主題は驚くべきもの。2人の娘の誘拐事件に右往左往する3人の父母たちの狼狽ぶりと、黄色い車のトランクの中で発見された女子高生の死体(?)に注目!

1歳の娘・水青を故郷、攀枝花市に捨てて都会に出た曲婷が、15年後の今、故郷に戻ってきたのは一体なぜ? 母娘の情愛が少しずつ復活し、クラスメイトとの良好な関係も構築していきながら、ヤクザの悪玉・老杜の登場に曲婷が恐れおののくのは一体なぜ? そして、そこで水青が提案した“あっと驚く提案”とは?

こりゃ面白い! またまた登場した、北京電影学院卒業の才媛に注目! 日本で公開に感謝し、本作のヒットを期待したい。

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

■中国の若手女性監督が実話を元に鋭い問題提起を！■

本作の邦題は『兎たちの暴走』。そう聞くと、何となく言葉の響きが似ているのが、若き FBI 訓練生クラリス役のジョディ・フォスターが、元精神科医の囚人ハンニバル・レクター役のアンソニー・ホプキンスと対峙した『羊たちの沈黙』(91 年)。同作は想像を絶するサイコサスペンスだったから、その内容は本作とは全然違うが、羊も兎も弱い者の象徴だから、両者のタイトルには、何らかの意味が！！また、原題は『兔子暴力』だから、ほぼ邦題と同じ。ところが、英題の『The Old Town Girls』は全然イメージが違うものになっている。それは一体なぜ？

本作は第 33 回東京国際映画祭でワールドプレミア上映されて話題を呼んだそうだが、そんな本作が、9 月 1 日からシネ・リーブル梅田で公開されると知ってビックリ！宮崎駿の『君たちはどう生きるか』は事前宣伝がゼロでも、いや、それがないことが逆に大きな宣伝効果を生んで大ヒット上映中だが、いくらチラシやイントロで「中国で最も注目される新進気鋭の女性監督、申瑜（シェン・ユー）監督の長編」と宣伝しても、本作のような（小さな）中国映画が日本でヒットすることはまずないだろう。しかし、本作のチラシには「臆病な白いウサギでさえ、追い詰められたとき、あなたの手を噛むことができる。なぜならウサギは剃刀のような鋭い切歯を持っているのだから。」と書かれているから、こりゃ面白そう！中国映画ファンの私としては、こりゃ必見！

■テーマはナニ？なぜ舞台を重工業都市攀枝花市に？■

「誘拐事件」といえば、日本ではかつての「吉展ちゃん事件」(63 年)が有名。また、横山秀夫の原作を映画化した、瀬々敬久監督の『64—ロクヨン—前編』(16 年)、『シネマ 38』10 頁)、『64—ロクヨン—後編』(16 年)、『シネマ 38』17 頁)も有名だ。しかし、申瑜監督が脚本を書こうとした時期に、中国の某工業都市で起きた某誘拐事件を知っている日本人は皆無だろう。そんな 2011 年に実際に起きた誘拐事件にインスパイアされた申瑜監督は、「中国では弱者の立場にある人々が暴力を振るう事件が急増していること」をモチーフとして、ある誘拐事件から生まれた「母と娘の悲劇」というテーマを描くことに。

興味深いのは、本作の舞台が、重工業が盛んな四川省攀枝花市と“特定”されていること。ちなみに、攀枝花市は中国南西部の四川省の最南端にある県級市で、北の成都から 614 キロの距離だ。申瑜監督は、なぜそんな都市を本作の舞台にしたの？

申瑜監督は本作のインタビューで、「四川省攀枝花市の高低差のある風土、重工業とマンガの街という土地柄が、独特の空気感をもたらしています。」との“質問”に対して、次の通り答えている。すなわち、

大きな山と川に囲まれた丘陵にある工業都市という風土を求めて、攀枝花へロケハンに出かけましたが、あの市の空港は機体が下降しないで着陸するような断崖絶壁の上にあり、凄い土地だなと期待が膨らみました。

街へ行く道すがら煙突が沢山あり、住宅街にも地底のような場所が広がっている。食べ物も柔らかいものと硬いもの、甘いものと苦いものがある、すべてにおいて落差が激しい。これは間違いなく映画の舞台になると確信しました。

私は 2000 年 8 月に、はじめて遼寧省大連への中国旅行に出かけたが、飛行機が下降していく時に見た、異国の地・中国の“大地”を今でもハッキリ覚えている。その後、私は約 20 回の中国旅行を重ねたが、その時々に見た中国の都市の姿も私の目に焼き付いている。そんな私には、攀枝花市は未だ見ぬ成都近くの工業都市だが、申瑜監督が攀枝花市を本作の舞台にした狙いをハッキリ感じ取ることができた。さて、あなたは・・・？

■□■人物相関図をしっかりと。3 人の“経済格差”も！■□■

中国人の名前は毛さん、王さん、李さんなど、覚えやすいものも多いが、日本人に馴染みの少ないものも多い。本作では、監督の申瑜をはじめ、母親役の曲婷（チュー・ティン）（万茜／ワン・チェン）、娘役の水青（シュイ・チン）（李庚希／リー・ゲンシー）という、2 人の主人公の名前や、水青の同級生の女の子たちの名前も日本人には馴染みの少ないものが多い。そのため、本作の“スリルとサスペンスに富んだストーリー”をわかりやすく理解するためには、まず人物相関図をしっかりと頭に入れる必要がある。



©Beijing Laurel Films Co., Ltd.

他方、本作の舞台となる工業都市、攀枝花市の高校に通っている“仲良し 3 人組”の女の子は、前述の①水青、②金熙（ジン・シー）（柴燁／チャイ・イエ）、③馬悅悅（マー・ユエユエ）（周子越／ヂォウ・ズーユエ）だが、この 3 人の経済格差はひどい。申瑜監督のインタビューによると、「3 人の少女たちは、それぞれ困難な家庭環境に悩んでいます。少女たちの家族設定にはどのような意図がありますか。」との質問に対し、「3 人の少女たち

は富裕層、一般層、貧困層の3種類の経済格差に属しています。金熙は一番裕福な家庭で、橋の上に住んでいます。しかし、事業に失敗した両親が、海外に逃亡してしまい、金熙が街に残されている、という設定です。水青は一般家庭で、両親はごく普通の仕事をしている。馬悅悦は最下層に育っていて、父親と一緒に橋の下で暮らしている。しかし、裕福な友達がいて、経済的援助を受けているという設定です。」と答えている。

■□■誘拐事件勃発！トランクの中は？3人の男女の行動は？■□■

優れた芸術作品は、冒頭にインパクトのあるテーマが提示されるケースが多い。その典型は、音楽ならベートーヴェンの交響曲第5番「運命」だが、中国映画なら、第5世代監督の張芸謀（チャン・イーモウ）や陳凱歌（チェン・カイコー）、そして第6世代監督の賈樟柯（ジャ・ジャンクー）や婁燁（ロウ・イエ）監督たちの作品だ。中国では第7世代、第8世代と順調に若手監督は育っているが、彼らもそれぞれの作品で、冒頭のテーマの提示に頭を悩ませているはずだ。

しかして、本作冒頭に登場するのは、もくもくと煙が立ちのぼる夜の街の姿。これを見ていると私は、1950～60年代に日本で一大社会問題になった“四日市公害問題”を思い出すが、本作のテーマはそれではなく、そんな重工業都市、攀枝花市を舞台に発生した、ある誘拐事件への対処だ。すなわち、そこでは、3人の男女が誘拐事件に巻き込まれた2人の娘の身代金200万元（＝4000万円）をどうするかについて話し合う風景が映し出されるので、それに注目！

その前に映し出されたド派手な黄色い車は新車のようだし、そこから携帯を持ち、煙草を吹かしながら出てきた女性、曲婷もド派手な超美人だ。もちろん、その時点では、誰が誰やらさっぱりわからないが、後に判明するところでは、この3人の男女は、①水青の母親・曲婷、②水青の父親・水浩（シュイ・ハウ）（是安／シー・アン）、③馬悅悦の父親・老馬（ラウマー）（潘斌龍／パン・ビンロン）だ。この3人の男女（父母）は、2人の娘の誘拐事件を聞いて右往左往するばかりだが、その後の行動は・・・？

■□■警察への通報は？あっと驚く派出所での行動に注目！■□■

到底金の準備などできない老馬も水浩も警察への通報を主張したが、曲婷だけは一人「通報したら水青が殺される」と断固反対。しかし、水浩がそれを無視して派出所に向けて車を走らせようとすると、曲婷もやむなく車の中へ。しかし、派出所から出てきた警察官に3人が事情を説明していると、そこに「成都に遊びに行っていた」と水青から連絡が入ってきたから、3人は一安心！？

そこで、「イタズラだったとわかったら、警察への届出もいらない」という警察官の処置はいささか問題だが、一安心した3人の男女に警察官は「マンゴーでも食べろ」と勧めたばかりか、「少し持って行け」と、攀枝花市でメチャ美味しいマンゴーを2箱も持ってきて、車のトランクの中に入れようとしたから、その親切ぶりには感心。ところが、そこでいきなり曲婷は、狼狽しながらそれを阻止しようとしたから、アレレ……。ひょっとし

て、トランクの中に何かヤバいものが入っているの？

以上のシークエンスを見ていると、「誘拐された」という2人の女の子が水浩と曲婷の娘である水青と、老馬の娘である馬悅悦であることは明らかだが、3人の話を聞いていると、この誘拐劇には、どこかに何らかのウラがありそうだ。

そして、マンガーを巡って、車のトランクの中が焦点になってくる中、にわかに曲婷は狼狽しながら、「この件は私しか知らないこと！水青は全く関わりのないこと！」と喚き始めたが、これは一体なぜ？そして、ついに曲婷が黄色い車のトランクを開けると、その中には何と・・・？

私は婁燁監督作品が大好きだが、彼の直近作『シャドウプレイ【完全版】』（18年）（『シネマ52』231頁）は、サスペンス色いっぱいのメチャ面白い作品だった。しかし、本作冒頭はそんな婁燁監督作品と雰囲気が全く同じだが、それは一体なぜ？それについては、あなた自身の目で本作のプロダクションノート等をしっかり勉強してもらいたい。

■□■曲婷はなぜ故郷に戻ってきたの？水青の母への想いは？■□■

冒頭に見た黄色い車は水浩のものではなく、曲婷のもの。それを明確にすべく（？）、申瑜監督は本作の冒頭でスリリングな主題を提示した後、スタイリッシュな服装で黄色い車を颯爽と運転して、1歳の時に故郷に捨てた娘・水青の元に戻ってきた曲婷の姿を映し出すので、それに注目！曲婷役の万茜は、台湾映画『軍中樂園』（14年）（『シネマ42』237頁）で「軍中樂園」なる娼館で働く「侍応生」役を演じて、第51回金馬獎最優秀助演女優賞を受賞した美人女優。同作で、彼女は別名「特約茶室」「831部隊」と呼ばれた、軍専属の慰安所で働かざるを得なかった“悲しい娼婦役”を見事に演じていたが、本作に見る、都会的な美女・曲婷役はそれとは全くの別人だ。これなら、1歳の時に自分と故郷を捨てて都会に出て行ってしまった女（母親）とはいえ、今は高校生になった水青が思慕の気持ちを持って憧れるのも、なるほどと頷ける。

夫の水浩は再婚し、現在、水青は継母との間に生まれた弟と4人暮らしだが、今もなお美しい母親曲婷の姿を眩しそうに見ている水青の顔を見ると、自分を捨てた母親であるにもかかわらず、曲婷への思慕の念や、その美しさへの憧れが断ち切れないようだ。そのため、2人だけになると、「自分が1番綺麗に写っている写真」を曲婷に渡した上、曲婷に「何か記念になるものが欲しい」とおねだりしていたほどだ。

他方、学校に行くと、クラスメイトの金熙から、「昨日の女は誰？」「こんなダサイ携帯ケースをもらって喜んでいるの？」と馬鹿にされたが、水青は十数年ぶりに故郷に戻ってきた母親・曲婷と再会できた嬉しさでいっぱいようだ。しかし、私と同じように（？）、水青が気になるのは、曲婷の左手の小指の傷。1967年に伊東ゆかりが歌って大ヒットした『小指の思い出』は「恋人の男に噛まれた愛おいしいキズ」だが、白い包帯が巻かれた曲婷のそれは、ひょっとして、日本のヤクザ社会でヘマをした時に見られる掟のように、指を詰めたもの・・・？

そんな風に、故郷に戻ってきた曲婷は当初、水青のクラスメイトたちに受け入れられることはなかったが、かつてダンサーをしていた曲婷が、高校の体育祭で行われるダンス大会の講師役として水青や金熙、馬悅悦たちのクラスが曲婷を招くことになると、徐々にその溝も埋まっていくことに。もちろん、そんな動きの中、再会当初はぎこちなかった曲婷と水青の仲も次第に打ち解けていき、曲婷も水青に対して母親らしい気持ちを見せ始めることに。

■□■謎の男“老杜”登場！サスペンス色が俄然濃厚に！■□■

本作は、冒頭のインパクトある主題の提示後、しばらくの間、曲婷と水青との“母娘の情愛”の復活ぶりが描かれる。そのため、冒頭に見た、あの黄色い車のトランクの中にあった女の子の死体(?)は誰のもの?その死体と200万円を要求する誘拐事件は如何なる関係に?という、2011年に発生した実話に基づく“誘拐事件”への興味が少しずつ薄れてくる。しかし、母娘の交流の進展に伴う、曲婷と水青との関係の良好化や、曲婷がダンス大会の講師役をしっかりと務めたことによる曲婷と水青のクラスメイトたちとの関係の良好化というストーリーがしばらく続いた後、「これぞ、ヤクザの最悪玉!」とも言うべき男、老杜(ラウトウ) (黄覺/ホァン・ジュエ)が登場してくるので、それに注目!

50年近く弁護士業をやっていると、巨額の借金を背負った時に、日本では例えば、加山雄三やさだまさしのように、責任を持って長期的にその返済をするのか、それとも姿をくらまして逃げてしまうのか、という点に人間の“分岐点”を見ることが多い。しかして、本作の曲婷はメチャ美人だけでも、どうやら借金に関しては“だらしない女”だったらしい。つまり、曲婷が約15年ぶりに故郷の攀枝花市に戻ってきたのは、多額の借金の返済を迫ってくるヤクザの悪玉・老杜から指を詰められた(?)上、ある時期までの借金の返済を確約させられたためらしい。もっとも、そんな危機的状況に陥った曲婷だが、表面上はキレイな服を着て、下派手な黄色い新車に乗って故郷に戻ってきたものの、結局借金返済のメドが立たないまま、無駄に時間だけが経過していったらしい。他方、曲婷との母娘の情愛が少しずつ復活していく中、そんな曲婷の苦境を知った水青は、あっと驚く“ある提案”を!それは一体ナニ?

■□■申瑜監督を支えたスタッフは?婁燁監督チームに注目!■□■

前述のように、婁燁監督の最新作『シャドウプレイ【完全版】』は、2013年4月14日に広州市の“都会の村”で起きた再開発を巡る「開発業者」VS「住民」の立ち退きを巡る騒乱を題材として、1980年代から30年間に及ぶ中国の経済成長の中で起きた人間の歪みを、時代に翻弄された7人の男女の姿から暴き出していった名作だった。同作の冒頭における主題の提示も、野外セックスに励む若い男女が突然、白骨死体を発見し驚くシーンから始まった。その上で、男女7人の過去と現在を交錯させながら、不動産開発を巡って“村のトップ”の役人がビルの上から突き落とされる、というサスペンス色濃厚な展開に進んでいった。本作は、それと同じように、終盤における老杜の登場後、俄然サスペンス色が濃

厚になるので、それに注目！

申瑜監督は北京電影学院の監督科を卒業した後、美術の仕事で映画界に入り、NHK のドキュメンタリー撮影や監督、CM ディレクターなどの経験を経た上で、本作で監督デビューを果たした才媛だ。そんな若手女性監督が、2011 年に起きた“ある誘拐事件”にインスパイアされて本作を作ったわけだが、申瑜監督を本作で支えた制作スタッフは、①エグゼクティブ・プロデューサーに、婁燁監督の『天安門、恋人たち』(06 年)『シネマ 21』259 頁)を制作したローレル・フィルムの代表、方励(ファン・リー)、②脚本に婁燁監督の『シャドウプレイ』で共同脚本を務めた邱玉潔(チウ・ユージェ)が担当している等、婁燁監督チームのスタッフが多い。本作冒頭に見る強烈な主題の提示や、老杜の登場以降、急速に強まるサスペンス色など、私が本作を見て「こりゃ、ひょっとして婁燁監督作品!？」と思ったのは、そのためだ。婁燁監督作品の大ファンである私としては、そんな意味でも本作は日本でのヒットを期待したい。

■女子高生でもモデルに?実父は貧乏だが、支援者は?■

一種妖艶な美しさを誇る曲婷に対し、女子高生の水青は可憐な少女。1960 年に『17 才』を歌ってデビューした時の歌手・南沙織は、沖縄出身だから顔も肌も浅黒かったが、水青は色白の美人。そして、髪のは長さはデビュー当時の南沙織と同じくらいのロングヘアだ。

物語の中では、あまり相性の良くない継母から、美容院に誘われて無理やり長い髪を切られるシークエンスが登場するが、そんな暮らしをしている水青は、攀枝花市では中流家庭らしい。他方、そんな水青に比べると、かつては工場労働者として働き、今は出稼ぎ労働をしている老馬を父親に持つ馬悦悦は貧困家庭だ。しかし、ある日、その馬悦悦は学校内でコマーシャル撮影のモデルになっていたから、その美女度はクラスメイトの中では群を抜いている。本作には、そんな美人で性格も良い馬悦悦を我が子のように可愛がり、貧しい父親に対して経済的援助を申し出る工場主夫婦が登場する。本作には、水青、金熙、馬悦悦という 3 人の女子高生が、教室の中やダンス大会の準備の風景が描かれ、さらに金熙が属している放送部の活動ぶり等も描かれるが、ハッキリ言って、これは曲婷と水青との母娘の情愛を描く上での付録的なストーリー!私はそう思っていたが、実はそんなストーリー展開の中で浮かび上がる 3 人の“経済格差”が後に大きな意味を持つことになるので、それに注目!すなわち、それは、その後に登場する 200 万円を要求する身代金目的の誘拐事件の下敷きになるわけだ。しかし、考えてみれば、それは当然。身代金目的の誘拐では、大金持ちの大切な人(例えばその娘)をターゲットに誘拐しなければ、意味がないのだから。

しかして、本作後半、借金の返済を厳しく迫る老杜からのプレッシャーを解消すべく登場してくる、水青の“ある提案”とは?そして、その(架空の)誘拐事件のターゲットになる人物とは?さらに、それを実行するのは、一体ダレ?

2023 (令和 5) 年 8 月 18 日記

『日本と中国』2282 (2023年11月1日)

兎たちの暴走

全国順次公開中



©Beijing Laurel Films Co., Ltd.

監督：シェン・ユー (申瑜)
脚本：シェン・ユー (申瑜)、チウ・ユー・ジエ (邱玉潔)、ファン・リー (方励)
プロデューサー：ファン・リー (方励)、ヤン・フエイ・ウェイ (楊菲非)
出演：ワン・チェン (ワン)、リ・ジェン (李庚希)、ホアン・ジュエ (黄觉) ほか

(2020年/中国/105分/北京語、中国語/日本語字幕：鈴木真理子/原題：兔子暴力 The Old Town Girls) 配給・宣伝：アップリンク

殺人も強盗も凶悪犯罪だが、『天国と地獄』(63年)や『64—ロクヨン—前編・後編』(16年)を觀れば、身代金目的の誘拐罪はある意味でそれ以上！ 第8世代監督の抬頭が顕著な中国で、11年に実際に起きた誘拐事件を元に超現実提起作が誕生！ 2百萬元(約4千万円)を要求された水青の父・水治へ母・曲婷と馬陸の父・老馬が左往右往する冒険は、交響曲第5番『運命』と同じく主題の提示が強烈だ。金の準備が不可能なら奮発！ それが当然だが曲婷だけは猛反対！ しかし、派出所で地元名物のマンガを食べさせてくれた親切な警官がそれをトランクに入れようすると、曲婷は急に狼狽！ 中には一体ナニが？ 曲婷はケバい化粧とド派手な新車で15年ぶりに四川省の故郷に戻っていたが、それは一体なぜ？ 他方、1歳の時に母に捨てられ継母らと巨匠中の水青はなぜ曲婷に反感せず、今なお思慕の念を？ 本

このタイトルは一体ナニ？ 身代金目的の誘拐は凶悪犯罪だが・・・

——北京電影学院卒の若き才媛、申瑜が放つ、憂鬱監督張りの強烈な問題提起に唖然！—— 作中盤では、女性特有の婉婉で描かれる2人の心の揺れに注目！ 少しずつ進む母娘関係の改善、出稼ぎの娘はからモデル並みの美女、病院への母・裕福な支援者の出現など、曲婷周辺の人間関係は今やすべて良好に！ 否！ 本作後半はヤクザの悪玉・弟達の登場によって様相が一変する。曲婷が期限までに返却で借金を返済できなければ左小指の傷だけではなく、命の危険まで！ そんな切羽詰まった状況下、母を救うべく水青が急出した驚くべき提案とは？ 『私たちの沈黙』(01年)は、弱い動物だったが、羊も兎も暴走したら？ 幸い誘拐事件の主役は電話だから、悦びをすれば借金の返済は可能！ 本作ラストに向けて、鬱々としたサスペンスに響いた展開はあなた自身の目でしっかりと！ さあ、兎たちの暴走はどこへ行き着くの？

熱血弁護士 坂和章平 中国映画を語る(80)

『映画を斬る』という文をはじめて映画に關する書物多数(公刊) 日本経済新聞、NHK放送文化財団日本友好協定書。



(なから・しちろう)
1944年東京都豊島区生まれ、大坂大学法学部卒。都市開発に關する訴訟を数多く手がけ、日本都市計画学会「石川賞」、同学会日本不倫学会「藤森賞」を受賞。『昭和的中國畫大觀』(2004年)、『1111のオマケ』(2011年)を刊行。